

2025 年 12 月 14 日 説教「ひとりのみどりごが」

イザヤ書 9 章 1～7 節

今朝は三回目のアドベント礼拝です。来主日がクリスマス礼拝となりますが、ルカの福音書の学びをお休みし、預言書であるイザヤ書を開き、そこにあるメシヤ預言の一つから学んでいきます。

1. 死の陰の人々が光を見た (1～2 節)

- ①やみがなくなる (1)「しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。」

どの時代の人々にも、悩みや苦しみがあります。イザヤの時代の人々アッシリヤ帝国の攻勢により、不安と恐れを持ちつつ歩んでいました。国としては闇の状態でありました。しかし、ここには闇がなくなるとあり、希望が示されています。ガリラヤ湖の西に、イスラエルの子孫である、ゼブルン部族とナフタリ部族に分割された地がありました。その地もアッシリヤによって攻めたてられていたのです。しかし、海沿いの道や、ヨルダン川の周辺、異邦人が多くいる地は安泰でした。

- ②大きな光を見た (2)「やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。」

闇の中を歩む民に希望はありませんでした。将来はどうなるだろうかという不安もありました。そんななか、イザヤを通して神は大きな光を見せてくださったのです。彼らのおかれた所は「死の陰の地」とも表現できるものでした。詩篇 23 篇 4 節を思い出します。それほどに暗い状態であったのです。明るい光を彼らは求めていました。そんな彼らの上に光が照らしたされたのです。

2. その国民に喜びを (3～5 節)

- ①その国民を増やし (3)「あなたはその国民をふやし、その喜びを増し加えられた。彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるとき楽しむように、あなたの御前で喜んだ。」

当時の民がアッシリヤ帝国の力のおののき、神への信仰も揺らぐような時に、神はイザヤを通して希望をもたらしてくださっていました。アッシリヤの圧政から自由を与えられていくというメッセージが与えられました。そして、イスラエルの民が増やされ、力を与えられて、喜びが備えられるのです。それは刈り入れの喜びに似ているし、相手から取った物を分配する時の楽しみにも似ているというのです。そして、彼らは主の前に礼拝をささげて喜ぶというのです。

- ②重荷のくびきを砕き (4)「あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、ミデヤンの日になされたように、粉々に砕かれたからだ。」

ここには前の節にある喜びの理由が示されます。ここに、「彼の重荷のく

びきと肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、粉々に砕かれた」とありますが、それが「ミデアンの日にされた」とあります。これは士師記7章にある出来事に基づいています。すなわち、神は民がミデアン人と戦うのに、たった300人を選び出されました。指導者ギデオンは神から教えられるままに、真夜中になって、兵を三つに分けました。戦いが始まるに及んで、ギデオン隊は次々に壺を割り、角笛をふきならし、たいまつを握って「主の剣、ギデオンの剣だ」と大声で叫んだのです。相手方は、不意をつかれ、大軍が来たと思い、全面にわたって同士討ちが起きたのです。そして、ついに勝利を得たのです。同じような出来事が起きることを示してくださっているのです。

③戦場で履いたくつ (5)「**戦場ではいたすすべてのくつ、血にまみれた着者は焼かれて、火のえじきとなる。**」

ただし、この戦いの時に使われる、全ての靴、血にまみれた着物は焼かれて、もはや用いられることはないというのです。

3. その方の主権はその肩にあり (58～59 節)

①ひとりの男の子が (6)「**ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。**」

ここからは、メシヤが生まれるという預言です。「ひとりの嬰兒 (みどりご) が、私達のために生まれる」というのです。それは、男の子が、神の民に与えられる、という恵みに満ちたお言葉でした。

②主権はその肩にあり (7) **主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者。力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。**

その男の子が特別な存在であることは以下のことで明らかになります。すなわち、第一にその子は主権者だということです。最高の統治権と支配権を持つ王なる方だとあるのです。第二にその方の存在を表す御名は、①不思議な助言者とありますが、これを新共同訳では驚くべき指導者としています。②力ある神とありますが、ずばりその子は神ご自身だということです。③永遠の父。その子は、人々を守る父のような存在となるということです。それも永遠の父です。④平和の君。平和とはシャロームです。すべての関係における結びの帯であり、それを取り持つ方だということです。

③その平和は限りなく (7)「**その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。**」

その主権が増し加わるということは、そのご支配は様々な面で広がり深まっていくということです。また平和 (シャローム) においては制限がないのです。そして、その方が「ダビデの王座に着く」というのは、ユダヤの民にとって、王の象徴であるダビデの流れから生まれて王国を治めることになるということです。さらにその方はさばきと正義をもって確立するということです。そして、それは決して人間の力ではなく、神のご熱心で成就するとあります。これらはまさにメシヤなる方がお生まれになるという預言でありました。

《展開と結論》

預言者イザヤは紀元前 740 年頃に預言者に召命されています。二十歳ぐらいでした。その召命の時のことは 6 章に記されています。「私は、『だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう』と言っておられる主の声を聞いたので、言った。『ここに、私がおります。私を遣わしてください。』」(6 章 8 節)。イザヤはウジヤ王、ヨタム王、アハズ王、ヒゼキヤ王の時代に預言者として活躍しました。イザヤ書は 66 章に及ぶ大預言書ですが、そこにはメシヤ (救い主) 預言が散りばめられています。そして、メシヤの誕生預言については、最も克明に記されています。今朝の聖書箇所は其中でも、覚えの良い部分であります。

その時代はユダヤの民にとっては、大試練の時でありました。アッシリア帝国が迫ってきていました。サマリヤが三年の包囲の後に陥落するのが、紀元前 721 年でしたが、その預言も含めて、大変緊迫していました。民は希望を失っていたでしょう。実際のところ、陥落後に捕囚される民も多かったですから民族にとっての大問題でした。そのような時に、イザヤを通して与えられた預言は、彼らに希望をもたらすものでした。彼らは光を見せられたのです。そして、そこには喜びがありました。かつてこの民にギデオンを通して与えられた出来事に通ずることが、その時代の小国にもやがてもたらされることは慰めだったのです。

もっとも、メシヤの到来はすぐではありませんでした。しかし、メシヤが来られるというお約束の預言は、大変に大きな望みでした。励ましてありました。民は待ちに待ちました。そして、メシヤ誕生預言から 700 年以上もたって、メシヤ (救い主) はお生まれになるのです。簡単に 700 年と言いますが、日本の平安時代に預言されたことが、今の時代に実現するほどの年月なのです。それほど待った後に救い主は世に現れてくださったのです。その方は、まさに主権者であり、不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君である方でした。新約の時代に生きる者たちは、そのことを明らかに知らされています。

今、望みを失っている方はいませんか。力のなさに、がっかりしている人はいませんか。イザヤの時代の人は待ち望みつつ希望と力を得ましたが、私達には救い主の誕生が知らされています。このことをまずは驚かされたのです。イエス・キリストは真の希望です。そのお誕生を喜ぶとともに、その御誕生の意味を噛みしめたいものです。救い主なるイエス・キリストは私達を救い出すためにおいでくださいました。大変な恵みです。そして、この方による救いにあずかるためにも、もう一度、この方の十字架と復活の福音に心をとめて、主の前に出ましょう。十字架と復活の福音に立ってこそ、キリストのお誕生は深い喜びとなってくるのです。一方、クリスマスは、この国では商業ベースにも乗って広く祝われます。批判はありますが、この時にはイエス・キリストをお伝えするチャンスです。イエス・キリストのお誕生を喜びつつ、お伝えしていくこの年のアドベントとさせていただきます。